

氏 名 : 渡部 杏菜
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第355号
学位授与年月日 : 令和3年3月16日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文名 : 聴覚障害児の音韻意識と読み書きの習得に関する研究
—聴覚特別支援学校在籍児を対象とした縦断的検討—
論文審査委員 : (主査) 教授 濱田 豊彦
(副査) 教授 渡部 匡隆 教授 葉石 光一
教授 南 道子 教授 澤 隆史

学位論文要旨

聴覚障害児は音声十分に受容できないことから、聴覚障害児には読み書きの習得に困難さを示し、音韻意識の形成が重要な意味を持つと考えられる。聴覚障害児の音韻意識には、指文字やかな文字を使用した視覚的手段を活用した聴覚障害児特有のプロセスがあることが示されている。本研究では指文字やかな文字を併用する聴覚特別支援学校の在籍児を対象として、音韻意識の発達と読み書きの習得を縦断的に検討し、音韻意識の発達と読み書きとの関連性を明らかにすることを目的とした。

検討1では、聴覚障害幼児に対して、音韻分解課題および指文字かな文字課題を約2年に渡り一定期間を空けて2~6回行い、音韻意識の発達と指文字、かな文字の習得の関係について分析した。その結果、聴覚障害幼児の音韻意識は4歳前半から5歳にかけて音韻分解が可能になることが示唆され、その背景には3歳代に一連の指文字やかな文字綴りが単語を表していることを理解し、4歳前半から5歳代に指文字表出能力、4歳後半からかな単語書字能力が発達することが関連していると推察された。また、音韻意識の発達と文字の習得との関連性から、聴覚障害児の中には音のイメージによって音韻意識を形成する者と、文字のイメージを活用して音韻意識を形成していく者が見られた。そして、音のイメージによって音韻意識を形成する者には、文字の習得が遅い傾向があるため、音のイメージに文字を一致させることを意識して読み書きの習得を促す必要があると考えられ、文字のイメージも活用して音韻意識を形成する者には、文字情報を積極的に用いて音韻意識と読み書きの習得を確立させていくことが有効であると考えられた。以上より、早期から文字が導入されている聴覚特別支援学校の環境の中では、聴覚障害児は使いやすい手段を用いて音韻意識を身につけていくことがわかり、音韻意識が発達する4歳から5歳にかけては、実態に合わせて聴覚障害児が使いやすい手段を用いて言葉を提示し、音韻意識の形成を促していくこと、そして、音声だけでは十分に形成され得ない音韻意識を文字等の視覚的手段を用いて確立させていく必要性を指摘する。また、3歳代では、身近な物の名前を指文字やかな文字で提示し、それが何を呼称したのかを理解させる指導、4歳代から5歳代にかけては音と文字の対応関係を意識し指文字やかな文字で表出させる指導をしていく必要があると思われる。

検討 2 では、検討 1 を実施した対象児で同聴覚特別支援学校の小学部に就学した聴覚障害児に対して、文理解テストと作文課題を行い、検討 1 の音韻分解課題および指文字かな文字課題の結果との関連性を分析した。その結果、文理解については、音のイメージを活用して音韻意識を形成してきた者の中には、助詞に注目しながらも、述語動詞や文全体と関係づけて助詞を捉えることができている者がいることが示唆された。また、4 歳後半で音韻分解課題の正答率が 60% に達しない場合、小学部 2 年までの文理解が遅れる可能性があり、聴覚障害児において 4 歳後半で清音単語と一部の特殊音節単語を音韻分解できない場合には早期に音韻意識に介入する必要があると考えられた。作文能力については、乳幼児期の音韻意識の発達の遅れが、書記言語の表出能力、特に文の構成力、文の叙述力、文量、文法的誤りの少なさと関連し、それらが学年相当の力があるかどうかの判断基準にもなると考えられた。以上より、教育現場では、まず、音韻意識の形成段階において、4 歳後半で清音単語と一部の特殊音節単語において音韻分解が可能であり、それに伴い、指文字やかな文字による単語の理解や表出ができるかどうかを見ていくことを提案する。できていない場合は、児童が使いやすい手段を用いて一つひとつの音に注目させ、聴覚障害児が持っている音韻意識と文字を対応させていき、音韻意識を確立させる必要がある。そして、小学部就学に向けて、語彙を増やすために、積極的に語彙を読んだり、書いたりする機会を設けるべきであろう。そして、文の理解・表出に至るまでの過程においては、助詞などの一つひとつの音に注目させるだけでなく、文全体の構成を意識して読んだり、書いたりすることを指導していく必要があると考えられる。視覚的手段を用いて、文構造を指導することや、それだけでなく日頃から経験したことを文にして最後までしっかり読んだり書いたりすることと共に、教員が細部まで注意して言葉かけをすることが大切になってくると思われる。